江戸川乱歩全作品

4

大江健三郎
全作品
4

新潮社

大江健三郎全作品4
一九六六年一二月二五日発行
一九七〇年一〇月三〇日九刷
著者大江健三郎
発行者佐藤亮一
発行所株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号一六二
電話東京(03)二六〇局一一一一
振替東京八〇八
大日本印刷、大口製本
定価四八〇円

©1966 Kenzaburo Ôe
Printed in Japan
〈第五回配本〉

乱丁本はお取替えします

大江健三郎全作品4目次

後退青年研究所　5
遅れてきた青年　21　長編小説
作家は文学によってなにをもたらしうるか？　345

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

大江健三郎全作品4

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

後退青年研究所

暗黒の深淵がこの現実世界のそこかしこにひらいて沈黙をたたえており、現実世界は、そのところどころの深淵にむかって漏斗状に傾斜しているので、この傾斜に敏感なものたちは、知らず知らずのうちにか、あるいは意識してこの傾斜をすべりおち、深淵の暗黒の沈黙のなかへ入りこんでゆく、そして現実世界における地獄を体験するわけである。

ぼくはこの暗黒の深淵のひとつのそばに、いわば地獄の関守のような形で立ちあっていたことがある。そして、ぼくがそれに関わっていた深淵への漏斗状の傾斜に敏感なものとは、政治的に、あるいは思想的に挫折を体験した青年たち、精神に傷をおっている青年たちであった。もっとも、かれらの多くは、肉体的にも傷痕をもっている者たちであったけれど。

そこを暗黒の深淵とよぶにしても、その現実世界の一つの地獄は、大学のそばの不動産会社のビルの三階にあって、つねに明るく、（ああ、人間はなぜこうも熱心に自分の周りを明るく照明することに昔から努力をかたむけてきたのだろう、人間が暗闇を、他の獣たちにくらべて格段の差をつけて激しく嫌っているのはなぜだろう。ぼくは日本人の一青年であってキリスト教徒でなく、その宗旨に関心も持たないが、この人間の暗闇への恐怖に考えいたるたびに、原罪という言葉をおもいだす）リノリューム張りの床は油の艶をうかべてみがきたてられており、ステンレスの事務用家具は軽快に、またいかにも能率的に、働く人間をそれ自体まちのぞんでいるようであった。

しかしぼくは、廊下からの扉をおして入ってくる挫折した青年が、ぼくのカードに必要事項を記入しにぼくの質問、それはカードの不備な部分に関する、簡単な質疑応答にすぎないが、とにかくぼくの質問にこたえ、隣の部屋に入って行くのを見送る時、やはりその明るくビジネスライクな部屋は地獄の入口のひとつであると感じたものである。

隣の部屋には鬼がいたか？　アメリカ東部の大学で極めて高度な教育をうけた新進気鋭の社会心理学者であるミスター・ゴルソンと通訳担当の東京女子大学の学生一人が待ちうけていた。そこへ、思想的に、あるいは政治的に挫折

した青年が、告白で頭をいっぱいにして憂鬱な一歩を踏みこんだわけである。その部屋をぼくの大学の仲間たちは、後退青年研究所とよんでいた。正しくは、ゴルソン・インタヴィュー・オフィスという名称をもってはいたが、このGIOを誰ひとりその本来の名においてよぶものはいなかったのである。結局ミスター・ゴルソンの質問は、なぜきみは後退したのか？　という問いにおわったし、みんな、なぜ自分が青年の身で後退をよぎなくされたか、を告白しにきたからである。

それは朝鮮動乱が終ったあとのかなり反動的な安定期であった、学生運動にとっても中だるみのエアポケットのような一時期で、学生たちはその社会的な関心をソヴィエト民謡を合唱することで代償していたし、二、三年間の激しい学生運動のさなかに傷ついた学生たちが復学して憂鬱で陰気な、年をくった学生としてその傷口をなめてみていた一時期であった。

そして、この傷ついた学生運動家を主な調査対象とする研究所が、東京大学のすぐ傍にアメリカ国籍のある若い学者によってひらかれ、それは毎日かなりの人数の、いわゆる後退学生を吸収していたのである。始めは、たんに次のような広告を大学新聞にだしただけで、多くの傷ついた学生がやってきたのだ、《学生運動を離れた旧活動家の学生をミスター・ゴルソンが待っています！》

ぼくはアルバイト学生としてそこにつとめていた。ぼくは二十歳にやっとたったばかりで、青年の憂鬱な表情や、皮膚に汚ならしくしみついてぬぐいとれない影のような陰気さにたいして、無感覚といってもいいくらいだったし同情的な気分になったりすることは、まずなかった。それでも、GIOが日本人にたいして優越者としての傲慢さを誇示する種類の研究所であったなら、そこへおずおずと自分の心の暗い襞のあいだのしこりをあらわにして見せにくる同胞をさばく仕事などはひきうけなかったろう。むしろ自分も、その沈鬱な告白者となって学生たちの行列のうしろにうなだれて帽子を胸にかかえたまま続くことをえらんだろう。

しかしゴルソン氏は標準的な明るい米人で短い油煙色の口髭こそ生やしているが、まだ三十歳に達してはいない男だったので、ぼくはあまり深刻なコムプレクスはなしに、かれのオフィスにつとめることができたわけである。日本にきている米人インテリには、奇妙に戦闘的で傍若無人な連中と、うってかわって温厚篤実な連中とがいるようだが、ぼくらがミスター・ゴルソンとよんでいたシカゴ生れ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

の社会心理学者は、その温厚篤実ながわの代表とでもいうべき人物であった。

ぼくには、今にいたっても、あのミスター・ゴルソンがなぜ日本に来て傷ついた学生の精神傾向を調査する仕事にたずさわることになったのか、はっきりこたえることができない。また広い見地からいえば、ぼくは今もなお、あの朝鮮動乱のあとの一時期に多くのアメリカ人たちが日本の学生の屈折した心理に関心をもち始めたのか、はっきりはわかっていない。社会心理学のいかにもアメリカ的な方法によって日本の学生たちを調査し、その結果を、あのアメリカ人たちはなんのために役だてようとしていたのだろう？

極東における反共宣伝の一つの基礎固めの方向に、あのアメリカ人たちの調査がふくまれていたのだ、と一般的に解釈することは一応人を納得させる要素をはらんではいる。しかし、ぼくのつとめていたＧＩＯについては、少なくとも反共宣伝につながって行きそうな印象はミスター・ゴルソンからあたえられなかった。

ゴルソン・インタヴィュー・オフィスはアメリカ本国に毎月、調査データを送っていたが、それはミスター・ゴルソンが卒業したか在学中だかの、東部の大学の研究所あてにであって、アメリカ国務省とか議会とかとは直接の関係がなかったようである。もっとも、そのオフィスで働いていたあいだ、ぼくが一種の自己嫌悪からオフィスの機能や目的にたいして冷淡であり、深く知ろうとしなかったということも一方にはあるわけだ。ぼくはオフィスにいるあいだ、そこへ訪ねてくる学生たちとおなじようにきわめて鬱屈した気持であった。その反面、大学の教室に出ているあいだは、理由もなく希望にあふれているような感情、いきいきした解放感があった。

それはミスター・ゴルソンの通訳およびタイピストであった女子大生にとってもおなじ事情であったのではないかと思う。オフィスで、ぼくはこの背が高すぎる痩せっぽちの女子大生が憂鬱から解放された表情をうかべるのを一瞬たりとも見たことがないけれど、東京大学と東京女子大学が合同で開催した、歌と踊りの大集会というもよおしで、偶然出会った時のわが憂鬱な同僚は、頬をじつに胸をうつ意外な薔薇色にそめており昂奮していてとめどなく短くかんだかい声で鳥がさえずるように笑ってばかりいた。そして翌日、ある種の期待と奇妙なはずかしさとを心にいだいてオフィスに出勤したぼくは、あいかわらず内分泌異常を思わせる憂鬱を眉根によせた深い皺にあらわした女子大生を再び見出したのであった。

ＧＩＯでの仕事は、きわめて憂鬱な性格のものであったわけである。ぼくは一度、ミスター・ゴルソンから、日本での仕事が一段落したら台湾か南鮮で同じ仕事をやるつもりだからそれを手伝いに一緒に日本を出ないかと熱心にすすめられたことがあるが、その時はきわめて乗り気になったものだ。そして南鮮で朝鮮人の挫折した青年たちをインタヴィューしている夢さえ見た。夢のなかでは滑稽なことにぼくがミスター・ゴルソンの役割をはたしているばかりか、片手に鞭をもっていて告白する青年を奴隷をむちうったようにぴしり、ぴしり殴っているのだった。これは、表面非常におだやかな調査室のようにみえたＧＩＯにも、結局は傷ついている青年の傷口に指をいれて脂肪と肉のあいだをひっかきまわすような不人情さがひそんでいたためかもしれない。それをぼくの潜在意識が感じとっていて、たまたま夢のなかであかるみに出したのだろう。

ぼくの仕事の中心は、インタヴィューをうける学生の身許調べと、インタヴィューが終ったあと学生に謝礼をはらうことであった。謝礼はインタヴィュー一時間につき五百円で、ミスター・ゴルソンはたいてい二時間のあいだインタヴィューがつづけられたように伝票を書いてよこしたし、本来は大学にかようための定期券があるため不要の交通費まで学生の現住所からわりださせたので、学生たちにとってこれは悪いアルバイトではなかった。ただ、特別な場合をのぞいて二度このアルバイトに応募することはできない、ということと、近い過去に学生運動への積極的な接近と後退という、思想的な劇がおこなわれた人間でなければならない、というところに、それも思ったほどではないにしても、一般的なアルバイトとしては難点があったわけである。

そこで、ＧＩＯを訪れるアルバイト学生の数は、ぼくがそこにつとめ始めて数箇月たつとめだって減りはじめた。ぼくは一日中、ひとりの学生の名もカードに記入しない日があったし、ミスター・ゴルソンは退屈しきり悲しそうに眉をひそめて部屋のなかを熊のようにぐるぐるまわったりして時をすごすことがあった。そういう成績不良の日にも、決して苛だったり、不機嫌なそぶりを示したりはしないのが通訳兼タイピストの女子大生で、彼女は机にむかってきちんと腰をおろし、文庫本で《矛盾論》や《実践論》を読んでいた。それも、とくに思想的な意味あいをまわりの者に感じさせる本の選び方であったということはできない。その一時期は、女子大で毛沢東がロマン・ローランのように愛読された一時期であったからだ。

調査に応募する学生がやってこない時、ミスター・ゴルソンは通訳兼タイピストと話すかわりに、ぼくのいる受付の部屋まで雑談を交わしにきたものだった。それは、女子大生がきわめて無口で殆ど自分の意見をのべなかったのと（それは異常に感じられるほどに徹底した無口さであって、ミスター・ゴルソンに自分の意見をのべることが、あたかも自分もまた、その挫折について告白しにくる傷ついた学生たちとおなじ存在に変えてしまう、とでも思いこんでいる風なのだ）ミスター・ゴルソンの方でもこの女子大生をいくぶん煙たがっていたからだろう。ぼくとミスター・ゴルソンとはオフィスの窓から本郷の大学の高い樹立を見やりながら、できるだけビジネスに関係のある話題、やってこない後退青年をめぐる話題をさけ、自然とりとめのないことばかりを長い時間話しあうのだった。

こういう自由な会話をつうじて、ぼくはこの赤貧白人（プア・ホワイト）の息子として奨学資金をえ大学に入った男が、決してブリリアントな才能をもってはいないにしても、きわめて深く日本の挫折青年に関心をいだいていることを知ったといっていい。そしてこういう問題を研究対象にえらんで現に日本にきて調査所をひらいた二十八、九のアメリカ人青年がいかにも奇妙な、変則な精神構造をもった男のように思われ、ぼくはミスター・ゴルソンを、深淵の主として見るよりも、この現実世界の深淵に吸いよせられた最初の失墜者として感じ始めるのであった。こういう考えはむろん自分にはねかえってくるのであって、ぼくは自分を、同胞の学生たちがその心情の暗い陥没を告白しにやってくる外国人のオフィスで働いている自分を、女衒か遣手婆のような種類の、ごく卑しい人間のように感じることがあった。そして自分が少年のころ、それは戦争の時代であったが、二十歳という年齢に薔薇色の幻影をいだいていたことを思いだし、平和の時にこのようにあいまいな奇妙な役まわりをしている二十歳の自分に、いいようのない苦渋の味のする嫌悪をいだいたものだ。

この自己嫌悪についてぼくがともに語りあうべきは、おなじアルバイト学生の女子大生にたいしてであったが、憂鬱な彼女は仕事が暇だとわきめもふらずに毛沢東を読んでいて、ぼくのいる部屋へは顔を見せなかった。ぼくのほうでも、奥の部屋へ入って行くことは否応なしに整理箱のカードを見ることであり、告白にやってきた憂鬱きわまる学生たちのイメージにおしつぶされることなので、決して女子大生のいる部屋の扉をこちらからひらくつもりにはなれないのであった。そこでぼくはやはり憂鬱な顔で、これも

憂鬱なミスター・ゴルソンととりとめなく話しあった。ああ、GIOはまさに憂鬱地獄であったわけだ！

ミスター・ゴルソンがぼくにかれの日本での仕事が終ったあと、台湾か朝鮮に一緒に行こうと誘ったのもこういう雑談のあいまにおいてであったし、ぼくがミスター・ゴルソンのなにげない動作のはしばしに同性愛的傾向を見たのもそういう屈託した時間においてであった。そしてぼくはミスター・ゴルソンがいかにも懐かしげに語る東部の田舎都市をはなれて東洋までやってきていることの陰にはこの同性愛的傾向に由来する原因がまつわっていて、ミスター・ゴルソンはむしろ日本に流刑になっているようなのではないかと考えたりもしたものである。それは大学のアルバイト課へ話相手とか案内人とか通訳とかいう名目でアルバイト学生をもとめにくる外国人の大半が同性愛的発展をのぞんでいる、そういう底意を心の内部にひそめている、ということがもはや常識であったからだ。ぼくの友人の一人はアルバイトを契機にして外国人のバイヤーと同性愛関係におちいり、その後バイヤーに棄てられると自殺した。棄てられたという言葉はこの自殺者が遺書に自分で書きこんだ言葉である。それもやはり、あの朝鮮動乱のあとの一時期だ。

ぼくとミスター・ゴルソンとは隣の部屋で文庫本のページをめくる音さえ聞えるくらいの低い声で黙りがちな話をいつも長いあいだ続けたが、おたがいの心情が緊密にふれあったりすることはなかった。ぼくは、貧しい英語力で面白くもない話し合いをアメリカ人相手にしている自分に苛だたしくなったり、なぜおれはここでこんなことをしているのだろう、という深い嘆きにとらえられたりした。そして、ぼくはたいていアメリカ人と一緒に仕事をしている日本人、それも三十前後の女たちが極度に大仰な身ぶりと表情で四六時中叫びたてていることの秘密をさぐりあてた気持だった。あの、派手な眼鏡と赤く大きい唇とで顔に痙攣的なアクセントをつけた女子大卒の女たちは、決してその心情にふれることのできないアメリカ人のまえで自分が埋没して行きそうな虚しく無味乾燥な放心から自分をひきとめようとしているのだ。彼女たちは古い女たちと同様に仕事への奴隷的な忍従を自己に課しているのだ。

ぼく自身にしてからが、現に面とむかって話しあっている相手の、ガラスほど無神経な感じに澄んでいる眼やぶよぶよしたゼリーに粉をふりかけたような顔と手の甲の皮膚、高く細い鼻、それに突然まったく予想に反した音をたてる唇などを見つめていると、その相手の人間の心情に深

く入りこんでゆき、その相手の顔に人間的な統一感をとりもどさせるためになら、簡単にいえばぼくとその相手とに人間的つながりを発見するためになら、同性愛の関係に入りこんでもいいとさえ、発作的に考えることがあったものだ。

ぼくは二十歳になったばかりだったし、人間的なつながりを殆どこの現実世界のあらゆるものに求めていた。それに若い青年にとって性的関係とはそれが正常なものであれ倒錯したものであれ、奇怪な無秩序を感じさせる他存在に盲目的な没入をおこなうことで、それに意味づけをし秩序をあたえ、自分の躰の一部のように親しいものにかえる行為なのだ。もしミスター・ゴルソンとぼくとの退屈しのぎの話し合いが毎日、毎日、永いあいだ続いたなら、ぼくは発作的にミスター・ゴルソンと同性愛の交渉をむすぶか、あるいは、これも発作的にミスター・ゴルソンと争ってGIOを辞めることになったかもしれない。

ところが、ある月始めのこと、その前の月にアメリカ本国へ送った調査データがあまりにも貧弱だったために、おりかえしミスター・ゴルソンあてにその怠慢ぶりを非難する手紙が届いた。それはかなり手きびしい内容をはらんだ手紙であったらしい。かれは朝、オフィスに出てきてそれを読むと昼まで部屋を苛だたしそうな早い足どりで歩きまわって考えこんでいた。かれは歩きまわるあいだも煙草をのんでいるので、灰がかれの通路に点々とおちて淡くあいまいな灰色の輪をつくった。ミスター・ゴルソンは午後になってやっと決心して、かれのオフィスの従業員みんなに、といっても掃除婦をのぞいて、ぼくと女子大生とかれ自身とに窮境を演説した。

ミスター・ゴルソンの論旨はきわめて明快であって、かれはGIOの調査データを先月の三倍の分量毎月おくることを本国から求められており、その最低線が今後保証されない時には極東研究員としての職務を解かれる、どうしてもわれわれは能率をあげなければならない、そういうことであった。

能率をあげるためにはどうしたらいいだろうか、大学新聞にもっと大きい広告を出そうか、また大学構内に張り紙して訴えかけようか、《学生運動を離れた旧活動家の学生をミスター・ゴルソンが待っています！》

ミスター・ゴルソンの問いにこたえて、ぼくはその広告による方法では決定的な状況の好転は望めないのではないだろうか、といった。すでにミスター・ゴルソンの後退青年研究所は学生たちのあいだに有名であって、これ以上広

告しても大勢の傷ついた青年が新しくやってくることはまずあるまい。

通訳兼タイピストの女子大生もほぼ同じ意見で、もし自分たちが大学構内に広告をはってまわり、またGIOに来てその体験を語ってくれそうな傷ついた青年をスカウトしてまわったとしても、GIOの調査が始まったころのように多くの青年がやってくることはあるまい。それは結局《傷ついた青年》がそう沢山この世に存在しているわけではなく、学生運動で挫折を体験した青年がGIOに呼びかけられるのを待って数知れなくひそんでいるわけでもない。もう底をついたのではないか？

ミスター・ゴルソンもぼくも通訳兼タイピストの女子大生も、暗い気持で永いあいだ議論しあった。ミスター・ゴルソンはいま日本を離れたくない個人的事情をもっていたし、この仕事を途中で放棄することは本国に戻っても大学の良いポストにつけなくなることを意味しているはずであった。また、ぼくにしても女子大生にしても、きわめて安定した、しかも効率の良いアルバイトとしてのGIOをそう早急に辞めたくはなかった。

ミスター・ゴルソンは、あと一箇月だけでいいから良い成績をあげたいといい始めた。議論がお先まっくらの行きづまりの色をおびてくるのにつれてミスター・ゴルソンが妥協案を出したわけだった。一箇月全力をあげて活動し、すばらしい成績をあげた上でなら、すでに日本の学生については大略調査が終ったと報告でき、別の任地へうつることを許されるだろう。いまのように悪い成績を非難されている時に任地変更を申し出たりしたらたちまち馘になって、南朝鮮や台湾には別の男が行くことになるだろう。

ぼくと女子大生も、いますぐこのアルバイトがなくなる場合とちがって一箇月余裕があれば別のアルバイトを探しだすひまもできるわけだった。そこでぼくら三人とも、次の一箇月に、実に良い報告をまとめることのできる調査をしようという結論にたっした。

それにしても、まずぼくらはGIOにやってくる後退青年を何人かみつけることなしには一枚の調査データカードもつくれないし、報告書もまとめられないわけである。その時不意にぼくが心にうかべたこと、それは後退青年を、なにか傷ついて挫折したような告白をする青年をぼくらの手でつくりあげること、簡単にいえば、任意の学生たちを後退青年にしたててGIOへ贋の告白をしにこさせるというプランだった。そしてそれは思いついてみればなぜ今までそれについて考えなかったかわからなく思われるほどの

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com